
ナツメの義理の兄になってみたいという願いを持つ俺が羨むようなお話

アステロイドベルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナツメの義理の兄になってみたいという願いを持つ俺が羨むようなお話

【Nコード】

N8693Z

【作者名】

アステロイドベルト

【あらすじ】

飛行機墜落事故で以下略。転生した先はポケモンの世界だった。

一話

暗がりの部屋。テンプレート的な展開が待たないことを期待していた俺の視界は、自然と望んでいないものを映し始めていた。

「揺りかごから落ちてしまったみたいですね」

不意に、背後からそんな声がした。

電球ひとつみたいな部屋だったのに、そっちの方へ向いた瞬間に花火が上がったみたいに明かりがはじけた。

跳ねている光を目で追いながら、俺は首をかしげつつ呆れてやる。

「死にました、だなんて言わないでくれよ……………こちらら楽しみにしていた修学旅行だ、途中の飛行機で落下してあなたは死にました、なんて待ってねーんですが」

「残念」

フードを目深に被っているせいで顔は見えないが、どうやら笑っているらしい。何だ？ 諦めろという意味かそれは？

兎角俺はと言われようが屈することはない。ここで地獄に行くか天国に行くかの烙印を押しつけられるっていうんなら、死に物狂いで逃げてやる。

「別にすぐ地獄へ叩き落としましょうって訳じゃありません。ただ、貴方が死んだのは色々都合が良いので、今回は特別にキャンペーンの実験台になって貰おうと思うのです」

「ビックリするくらい話が全然見えなくて俺は困っています」

「理解できなくても構いません。とにかくあなたには一度元の世界とは別の場所へ生まれ変わってもらいます」

「いやいやいや、待って待って待ってくださいよ……ちっとくらい説明してくれ、三行くらいでいいから」

「三行もダラダラと説明するわけにはいきません。そろそろ時間なので身構えておいてください。一瞬で視界が0になりますから」

怖いなオイ。

ていうか、生まれ変わるだの何だのと言つのは百歩譲って納得するとして、できればどんな場所に飛ばされるのかくらい教えてくれたっていいのではないだろうか？

それを聞いても面倒くさいの一点張りなので、俺は自然と質問するのを諦めていた。

俺は高校二年の冬、いざ修学旅行な普通の人間だった。

とくに突飛した部分もなければ褒め称えられるような人間でもない。

家にはいてもいなくても同じ。帰宅を待つてくれる家族はいないし、別に必要でもなく。

友達だけならアホみたいに出来たが、家族だけは一人もいなかったんだ。

「何一人で語ってるんですか」

「口には出してなかったはずなんだけど……」

「丸聞こえですよ。それよりなんですか今の経歴は。同情して欲しいんですか？」

「同情してっ！ さびしいからっ！」

無様に跳ねまわるなんてことはしないけど、慰めてほしいのは事実だったのかもしれない。

我ながらなんともつまらない人間である。

「そういえば、アンタは神様かなんかってことで良いのか？」

「……さつきから気になってたんですけど、あなた常識人の割には異様に物事を飲みこみますよね。頭ごなしに説明してくれって顔もしてませんし」

「百聞は一見に如かずってことわざあるだろ？」

「使いどころが正しいのかどうか」

「つまり、目の前で起こった事象について、俺はとやかく疑ったりするのは無駄だと思うんだよ」

「まあ、そっちの方が私にとっては好都合ですが。これからのあな

たにとつても」

「はい」

「なんですか『はい』って……」

「いや、一々事細かに返答するの面倒だったからさ」

「……そうですね。あなた、本当にこの状況飲み込めてるんですか？」

「三分の一くらいのどにつつかえてる」

「吐きだしてみてください」

「嫌だ」

ムスツ、とした態度が陰に隠れていても伝わるぞ。
明らかに不機嫌になってしまった自称神様は、腕を組んで俺に背を向けつつ最後に呟いた。

そろそろ時間ですよ、と。

そういえば俺、今から生まれ変わるんだっけ？
一度やってみたかったんだよね、この高校生の知識を持った状態で小学生時代。異様なほど進んだ課題解いちゃったりして。

「はあ……下らない……」

「また勝手に覗き見しやがったな自称神様」

「無駄口叩いてないで、そろそろ目を閉じたらどうですか？ 来ますよ寒波が」

「いやあ怖い。最後に女の子を抱きしめてみたかったなあ……」

「仕方ないですね……ほら、どうぞ」

ん？

何を言っているんだこの真つ黒クロスケは。いや、ローブとそのフードのせいで全身黒尽くめなだけなんだが。

そんな泣く子も黙る小さなアヤシイ人物が、俺に向かって手を広げている。何を考えているのだろうか。

「何をしているんでしょうか」

「最後に女の子を抱きしめてみたかったのでしょうか？ どうぞ、遠慮なく」

「いや、女の子？ 女？ ? 女性なのオマエ？」

「いい加減にしてください。結構恥ずかしいんです」

「全然凹凸ないから、そんな気が起こらない……」

「ぶち殺しますよ」

物騒なことを言いつつ、神様は不貞腐れ気味に手を畳んでしまった。勿体ない事したか？

いや、初対面の少女を腕に収めたって何も面白くないだろう。ちやんとしたお付き合いの上で云々。」

暫くすると、俺の目の前に身長より少し高いくらいの扉が現れた。赤、青、緑の装飾が施してあり、それ以外にメッキのようなテカテカ光る宝石が所々はめ込まれている。

「これからこれを潜る者のが味わう困難の数だといわれています」

「いや、多すぎだろう。自殺しかねんぞ」

「つまらない冗談は止めて、さっさと開けちゃってください。私も早急に片づけたい債務が腐るほどあるんですから」

俺ってこんな冷たい神様の作ったルールの上で生きていたのか…。

まあ、いいか。これからどんな場所でどんなルールを課せられて生きていくのかは別の話だし、今思い悩んだって分かるようなことでもない。

ドアノブに手をかけると、意外とずっしりして重かった。向こう側が拒絶しているみたいに思えて、なんだか悲しくなってくる。

「よっころしよ」

バキン、という扉が開くというよりカギが折れてしまったような音と共に、扉が開いた。

向こう側に広がっていたのは、豪勢なシャンデリアみたいな世界。見るのも嫌になるほど、まぶしい光の世界。

「まあ、精々頑張ればいいです、人間さん」

送り言葉と共に俺は足を踏み入れた。おおっ、温かいな。ふわっとした温暖な空気と共に髪が煽られ、一気に太陽が落下していく。

「お邪魔しまーすっど……」

ノックはしなくてよかったんだよな？

一話

単刀直入に言うと、俺はヤマブキシティという名の街で、普通に民家の一人息子として生まれた。

この名前で既に察しているとは思うが、どうやら俺はポケットモンスターという名の生物が息づく世界に生まれ落ちてしまったらしい。

いや、別に文句はないんだ。だって楽しいからさ。

家の中には数匹の可愛らしい生物がトコトコ歩いたり、自分のポケモンを扱って戦わせたり。

バトルは当初何とも気が引ける行為だったのだけれども、どうやらポケモンたちも嫌がってはいないみたいだし、むしろそういうのを望んでいると見える。

ポケモンにとってはスポーツと変わらないらしい。

まあこの流れだと、多分どこかで主人公と出会って、普通に普通のトレーナーとして倒された後に有り金引き剥がされるのだろうな、なんて思い悩んでいた矢先だ。

父がぽっくり逝ってしまった。

別段危険な仕事をしていたわけではない。確かシルフカンパニーの一般社員だった筈だ。

そんな何の変哲もない人間がなぜ急死したのか。俺が知りたい。

さて、そんなわけで内は母子家庭の厳しい毎日を送る羽目になってしまっではないか。

なんてことを考え始めたのは父がいなくなって半年後の話で、それまではベトベターもびっくりなドンヨリ空気を垂れ流しながら布団にくるまっていたのだが。

そんなとき、母さんの家に父の知り合いだという男性が現れた。

最初は俺も警戒心むき出しで威嚇気味だったのだが、知りあうに連れてその人の良い場所ばかりが見えてきた。

悪い人ではなさそうだ。俺がそういうイメージを持った時、既に母さんとその男性の関係は非常に親密になった後。

いずれ結婚してしまうんではないだろうか？ と思っていた。構わないんだけどさ。

俺はそんなさくらんぼみたいな空間にいずれ、仕方なく家から足を出した。

だって無理だろう。絶対お邪魔じゃん。そういうの察する年齢なのよね。

まだ十四歳だけでも。

俺の手持ちは”ハッサム”一匹しかいない。父さんから譲り受けたストライクを、またまた父さんが持ち帰ったメタルコートで進化させたのだ。

いかつい見てくれのせいで、リビングでモニターボールから出した状態は母さんがビビるからいないが、こうして街中ではボール

の中から放している。

ボールの中は快適らしいけど、こうやって外の空気吸った方が良いだろ。

「家にいずらいつて、我が家なのにおかしいよな」

横で歩くハッサムは、心底同意したようにうなずいた。

「そーだ、近い内に旅にでも出るか？　こうして外と家を何度も往復する毎日で、偶然帰ったら「ピー」だったら困るし」

興味深そうな表情のハッサム。暫くすると、こくこくと今度は強く何度もうなずいた。

「ならさっそ「おーい！　アンバー君！」」

誰だ？　俺の華麗なる門出を遮るのは。万死に以下略。

「ふう……やっど追いついた……。男の子はやっぱりわんぱくだな」

「どうしたんですか？　こんなところまで。あと、俺はやんちゃ坊主じゃありません」

「ああ、君に聞きたいことがあってな……その……」

言うまでもないと思うが、この人が俺の母さんとムフフな関係にある男性だ。

この人、有名人なのか外に出るとやけに注目されている。芸能人か何かか？　確かに整った容姿ではあるが、そういった振舞いは見

られない。

どっちかっていうと、トレーナー気質だ。

「私の……子どもにならないか？」

その後、話は予想以上にトントン拍子に進んだ。

再婚を果たした母さんは前みたいに明るさを取り戻しつつあり、なおかつ家の事情も回復している。

まあ、プラスの方向に進んでいるのだろう。別に文句はない。

家族のいなかった俺にとって、その家族にとって何が間違っているのかなんて判断できないのだから。

さて、しみりした空気は全くなれないので、この話はここまでにしよう。

一つ驚いたことと言えば、あの男性の職業、実はジムリーダーだったらしい。

普通街に住んでいるなら知っているだろう？ と自分でも突っ込みを入れたいが、残念ながらリーグ関係に興味のない俺にとって、

そのあたりはノーマークだったのだ。

それに、俺の知っているヤマブキのジムリーダーは別の人物だ。

その人物、もっと付け足せば少女は、現リーダーの娘にあたる人物らしい。

病によって命を落としてしまった自分の愛する人。だから、あの人は母さんに優しくしていたんだ。

崩れかけた彼だからこそ、それと同じ境遇だった母さんを支えた、と。

他人だと思えなかったんだろうな。父さんとは友人だったららしいし。

難しい話はここでおしまい。ここからは端的に日常が続いている。

「今日から君の妹になる、ナツメだ……………ほら、挨拶」

そう言って、新しい父さんが横に立つ少女を促した。

長い髪。俺の知っている姿と比べて大分小さい。

「初めまして。宜しく頼む」

無愛想だ。

まあ予想はしていたがな。

そんな出会い方だった。

暮らしていく上で理解できたのは、彼女が普通の人間ではないところだ。

超能力者。そういう人間らしい。
だからって注目するわけでもないが、確かに珍しい。
集中すれば心を読んだり、人を探したりとポケモンも顔負けなこ
とまでやってのけてしまう。

ナツメ。いつか、この街のジムリーダーになる少女の名だ。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム LV22

わざ

メタルクロー れんぞくぎり

三話

ナツメと遊ぼうとしたのだが、なぜか拒否された。

そんな毎日が続く中、ある日父さんがジムを休み、俺を自分の部屋に呼んだ。

威厳ある父、なんて人ではないが、やはり父親という肩書だけでそういう雰囲気が付きまわってしまう。

俺はハッサムの眠るボールを腰に付けたまま、父さんの部屋へと入っていく。

ジムリーダーなだけあって、ポケモンに対する知識を含めた本が多い。殆ど技に対する専門書ばかりだが。

父さんは俺を椅子に座らせると、自分はベッドに腰かけた。

「それで、何の用ですか？」

ボールを手の中で転がしながら、俺を呼んだ人物に問いかける。すると、父さんはうーむ、と腕を組みながら両目を閉じてうつつむいた。

どうしたんだ？　いつもは考えていることは全て一直線に投げかけてくるくせに。

自分より二倍以上生きている男を眺めつつ首を傾げていると、決心するように強くうなずいた。

「その、だな。アンバー、ナツメと一緒に旅へ出てみないか？」

「冗談なら明日お願いします」

「明日なら聞いてくれるのか？」

「いや無理ですけど、なぜ今？　それもナツメも連れてけなんて……」

正直気まずい。可愛いし、一緒にいられるのは大歓迎なんだけど。

「あの子、母親が死んでからずっと心を閉ざしてしまって……私も何度か外へ扉を開いてやろうと思ったのだが、どうにも君のように拒絶されてしまっただけ」

「はあ……」

「だから、旅でたくさんを経験して、その中で人との関わりを学んでほしいのだよ」

「簡単に事が進みますかね……」

「私はいずれ、君にジムを継いでもらおうと思っている」

「いやですよ。向いてないから」

「いつか思ってくれただけでいいんだ。君の心が言ったときに、また教えてくれ」

そこで、俺と父さんの会話は終わった。

彼女がジムリーダーになるのはまだ少し先の話だし、ここで経験を積んでその上で就任する。

まあ、正確な彼女の過去を知らない俺としては、結構辻褃の合う流れだと思うが。

それに、義理とはいえ兄だ。彼女のためになる事を死ぬまでに一度は果たしておくべきだろう。

ということで義妹の部屋の前に、俺は現在進行形で突っ立っている。

ドアノブに手をかけるか否か。こんな年（15歳）してなんだが、年の近い女の子の部屋に入るといのは至難の技だ。

童貞臭い。分かってる。

（クソツ！ 回せ俺の右手！ いつもは素早く動くだろうに！！）

情けないことを心の中で叫んでいると、勝手に扉が開いた。

木製のドアが音を立てながら開き、中から長い髪をなびかせる女の子が。

「人の部屋の前で下品なことを考えるのは止めてくれ……」

「すまんすまん。つか、扉越しても分かるのか？」

「お前は無自覚に感情を膨張させ過ぎなんだ。それで、何か用か？」
何を言っているのか分からないが、とりあえず要件は口に出す必要がありそうだ。

俺は父さんから頼まれたという事と、その内容を告げた。
ふむ、と父さんと同じような仕草でうつむくナツメ。やはり親子だな。

にしても、旅つつつてもどういうルートを迎えればいいんだ？
それ以前にカントーでいいのか。いやそこまで遠くに行く訳には
ならんのだがな。

暫く俺が考え事をしてると、いつの間にかナツメがこっちをジ
ッと見つめていた。

「決まったぞ」

「何が？」

「本気で言っているのか？」

「冗談だ。決まったんだろ？ どうするんだ？」

「行くさ。明日にでも出る。準備しておけ」

早。

父さんにナツメが承諾したことを知らせると、予想通り驚いた様子で俺を出迎えた。

「驚いた、あの子がそんな簡単に？」

「俺への信頼ってやつですよ」

「よく言う」

くつくつく、と笑う義父。それは俺がナツメに信用されていないってことが。

そんな下らない事は置いて、とりあえず準備に取り掛からねばならない。

資金は父さんから受け取った。ざっと五万円。なかなかの金額だ。宿泊はその街々で宿を探せばいいだろう。

自室で持ち物の整理をしている俺は、そんなことを考えていた。

「さて、急な話だが明日、俺たちの壮大な旅が始まるぞハッサム」

ボールから出し、壁に寄り掛かっている幼馴染のような相棒に告げる。

ハッサムはこくりとうなずくと、確認するように自分のハサミを閉じたり開いたりし始めた。

父さんから貰ったのは、資金だけではない。

地方を巡れと言われたのだ。

何年経とうが構わない、そこで自分を成長させると。

「ガキの頃の不思議探検みたいで面白そうだな、俗に言うワクワクが止まらないってやつだ」

こんな都会でそんな事をする機会もなかったし、生前は自分のしたいことができなかつた。

今思えば、俺は感謝すべきなのかもしれない。誰に？

「さて、と。母さんには父さんから話してくれるみたいだし、可愛い義妹との旅が幕を上げるぞ」

ハッサムの方を向くと、既に両目を閉じて眠っていた。ボールに戻しておいた方が良かったらどうか？

いや、まあいいか。

「おやすみ、ハッサム」

部屋の明かりを消して、俺は相棒の頭をなでてやる。

明日がそれなりに楽しみだ。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム LV28

わざ

メタルクロー れんぞくぎり きりたく

四話

目覚まし時計がうるさい音を鳴らす中、俺は暗闇から目を避けた。

「うるっさい」

俺が叫ぼうとしたその瞬間、バタンと扉を開けた少女が代わりにしかめっ面で俺に向かってシャウトした。

目覚まし時計の音を止めると、黙って扉を閉じる。どうやら隣の部屋まで聞こえていたらしい。

ハッサムもさっきのナツメの声でびっくりしたのか、既に目を覚ましてポカーンとしている。

「怒鳴られちった」

朝ごはんを食べにリビングへ向かうと、そこには既にムスツとした表情のナツメが席に座っていた。

「なんだよ、別にお着替えシーンに直面したって訳でもないだろうに」

「そんなことをしてみる。明日から足で歩けなくしてやる」

「いや、でもさ。これから旅する訳だから、自然と節約のために宿は一部屋になる。そうするとそういうラッキーイベントも起こりうるんだぞ？」

「それ以上言うな。気分が悪くなる」

内の義妹は短気だな。

聞こえぬようにそう呟いていると、次は父さんがリビングにやってきた。

大きなあくび。昨日は親子だから似ているだの何だの言ったが、ナツメは絶対に人前であんなことはしないだろうな。

（恥ずかしがり屋だからなーもー）

「恥ずかしがってなどないっ！」

「人の心を勝手に読まないで頂こうか」

まったく。ああしてムキになってるところは可愛いんだが、いかにせん無愛想極まりないから。

「可愛いとかいうなっ!」

「だから何で俺の心読んでんだよ?」

「はいはいアンバー、ナツメちゃんをいじめるのはその辺にしておきなさい」

母さんがそう俺に言いながら、朝食を運んでくる。どう見たら俺がナツメにちょっかい出してたように捉えられるんだ……。

まあいいか。今日は大変な毎日の頭だ。初日から一々細かいことに怒りを覚えていては身が持たない。

ムスツとしたままのナツメ。きまらずい……気まらずいぞつ。

パンを頬張りながら俺が心底叫んでいると、ナツメの正面に座っている父さんが、彼女の方を向いて軽い感じで口を開いた。

「それにしても、お前が簡単に旅に赴くとは思ってもみなかったよ」

「良い経験だと思ったんだ。ポケモンたちも、いつまでも陰気な部屋で閉じこもっていたくないだろうから」

「ポケモンもそうだが、私はナツメにも外の空気にあたってほしいんだ。愛娘が外の楽しさを知らないまま、一生を過ごすのは親として如何な物かと思ってるね」

「……………」

珍しくいやそうな顔をしていない。いや、そんな嫌悪の表情は俺にしか向けな……………空しくなってきた。

「ナツメちゃんは、どんなポケモンを？」

母さんがそう尋ねると、ナツメは素直に腰からモンスターボールを取り出した。

数は3。中から現れたのは、ユンゲラー、バリヤード、スリープ。タイプの相性的には連勝出来そうなパーティーだが、俺以外の相手に対しては圧倒的だろう。

ハッサムはエスパーが苦手なタイプが折り重なったようなタイプだからな。

「賢そうな子たちね！ アンバーは？」

「知ってるだろ、ハッサムだよ」

「へえ〜……あなたたち、小さいころからずっと一緒よね」

「親友だよ」

最後のパンの一切れを口に放り込むと、父さんが既に何も乗っていない皿を俺の皿と重ねて台所に持って行きながら、最初にどこへ向かうのか尋ねてきた。

俺は間髪いれず、

「クチバの港。そこから別の地方に行こうと思っています」

「ほう……さっそく私の上げたチケットが役に立つ訳か！」

何から何まで感謝します、と頭を下げた後、俺は隣の席でいまだ

にパンの一枚も食べきれないナツメの方を向いた。

大分昔に「食べるの遅いな、ナツメは」と言っただけの時、にらみつけるで防御力を下げられたことがあるがあえて何も言わんつ。

「最初に行きたい地方は？ リクエストはあるか？」

「別にどこでも構わない……………」

「そっか……………」

意気こんでいたものの、いざ決めるとなると迷う。

女の子を品定めしてる気分だぜ！

「最低だな……………」

「まさかと思ってカマ掛けてみたが、またか？ 実はお前俺のこと大好きだろ」

「馬鹿を言うな。高々虫タイプ一匹で鼻を高くするんじゃない」

「何だとう？ 三縦してやるから外に」なら、シンオウ地方なんてどう？」「

喧嘩を売りそうになった俺を遮って、母さんが急に意見を出した。三縦はまた今度にして、今は母さんに理由を聞いてみるとしよう。

「ほら、あそこって北だから雪が見れるじゃない？ この辺りじゃ滅多に振らないし、行ってみたら？」

まあ、確かに生れてこの方テレビでしか雪なんざ見たことないが、

そんな理由で安易に選ぶべきだろうか？

「いいんじゃないか？ 私はそれに賛成だ」

「ふむ。ナツメがそういうならそうするか」

「あらあら、アンバーったらナツメちゃんの事が大好きなのねえ」

「何を今さら……」

「え……？」

「え？」

ナツメの疑問の「え……？」に、俺もつられて同様に呆けた顔をしてしまう。

え、何？ 何その「お前私のこと嫌ってたんじゃないの」「みたいな顔は？

愛情たっぷりに接していたつもりなんだけど。

「そ……そうか……」

何だこのいまだかつてない気まずい空気。

「私は部屋で最後の確認をする。準備ができたなら呼びに来てくれ…

…」

「あ、ああ………了解」

何だっ たんだ？

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム L V 2 8 特性 テクニシャン

わざ

メタルクロー れんぞくぎり きりさく

名前 ナツメ

手持ち

ユンゲラー L V 2 3 特性 シンクロ

わざ

サイケこうせん かなしばり めいそう

バリヤード L V 2 0 特性 フィルター

わざ

ねんりき リフレクター ひかりのかべ

スリープ L V 2 1 特性 よちむ

わざ

さいみんじゆつ ねんりき

五話

送り出してくれた両親の顔を思い出しながら、俺は揺れる高速船の上でフラついていた。

船酔いだ。しかもこんなに揺れるとはな……………。

ドサツ、と自室のベットへ横になる俺を、椅子に座っているナツメが憐みの視線で眺めている。

俺が愛情たっぷり云々言った時は何だかよく分からん様子で自室に籠っていたが、暫くすると特に何の変化もない状態で部屋から顔を出した。

そして、今はこうして俺を小馬鹿にするような表情をしている。ちっとは動揺でもしたのかと思っただがなあ……………。

「うええ……………気分悪い……………」

「全く、無様な格好だ」

「……………なあ、随分前から気になってただけだよ」

吐気のせいで陰の残る俺の顔に、ナツメが相変わらずの視線を向けてくる。

ベットに転がったまま、俺は数年前から気になっていた事を吐きだした。

「オマエ、女らしい言葉遣いとかしねーのな」

「義兄殿が変な気を起こさぬよう、こうして少しでも女らしさを抜いているのさ」

「そこまでするのか……」

どうやら心底信頼を失っているらしい。

ああ……それにしても気分が悪い。吐気から逃れる方法は無い物か。

「吐くならトイレでしてくれよ……部屋が腐るような臭いに占められるのは迷惑千万だ」

「……あい。ハッサム、運んでくれ」

壁に寄り掛かっていた両手がハサミの赤い虫ポケモン、ハッサムにおんぶして貰い、情けないうめき声を出しながら俺はトイレへと運び込まれた。

「ふう……大分スッキリした」

口の中を濯ぎ、ボールにハッサムを戻した俺はそんな事を呟きながらトイレから脱出した。

地方を巡るとだけあって、結構優雅な振舞いな貴婦人や紳士が多いな。

(トイレまでの道、ハッサムに任せてたから自分の部屋が分からない……)

廊下を延々と彷徨っていると、風の気持ちいい景色の開けた船の甲板に出た。

ここなら楽だ。どんよりした感覚もない。

「ふいいい……高速船って言ってたし、外見は小さいモンだと思ってたが、案外広いな」

もうカントーは見えなくなっている。今は……お隣のジョウトを過ぎたってトコだな。

ハッサムも出してやろうと思ったが、どうやら眠っているらしい。

「おや、君はもしかして、アンバー君ではないかね？」

ふと、背後からそんな声が聞こえた。

掠れた老人の声だ。振り返ると、そこにいたのは予想通り七十代の杖をついた男性だった。

話を聞くとところによると、死んだ父さんの古い知人だとか。

シンオウには”商談”の用事で向かうらしい。

「父上のことは残念だった……私も、もう少し気遣っておけば

よかったよ」

「いえ、父は幸せそうな顔で眠っていましたし。誰にも非は無いと俺は思っています」

「君がそういつてくれると、少し気持ちが楽になったよ」

ふふふ、と笑うご老人に、俺も苦笑交じりで返した。

父さんは顔が広がったのか、時折こうして知り合いだ、という人物と出会う。

まあ、大きく有名なシルフカンパニーの会社員としてのこともあったのだろう。度々地方を飛んでいたし。

「そつだ。君の父上から預かっていたポケモンがいるのだよ」

そついうと、彼は懐から一個のモンスターボールを取り出した。

何やらカタカタと震えている。興奮気味なのか？ もし威嚇してるってんなら怖いな……。

俺がそんな空気を出しながら表情を引きつらせていたせいか、老人は「はっはっは」と笑いながらボールを俺に手渡した。

「懐かしい匂いを感じて、少し喜んでいるのだろう。この子は君の父上に大変懐いていたからね」

「そつでしたか……………」

「ふふ、開いた瞬間に噛みつかれるとでも思ったかね？」

「ええ、正直」

「はっはっは、素直だね君は。父上そつくりだ」

ボールから出してやると、そこから現れたのは青い体と同じ色の二つの腕を持った、いかにも重たそうなポケモンだった。

名前は確か……”メタング”だったか。

「預かった時はまだダンバルだったのだがね。一緒にいたら進化してしまつて」

「いえ、有難うございます……」

「そうか。それならいいんだ」

そういうと、ご老人は杖を持ったまま肘かけに腕を置き、遠く離れていくジョウト地方へ目を向けた。

何だろつ。こう、大物つていうか。どこかで顔を見たことがある気がする。

「君の父上は、鋼タイプのポケモンを好んでいたなあ……」

知ってる。だから、俺にハッサムを与えてくれたんだ。

父さんの手持ちのポケモンも、鋼タイプ一色だったのを覚えている。

確か、そのポケモンたちは今母さんに預けられているんだっけか。

「では、私はこの辺で………また会った時、そのメタングが強くなっているのを期待しているよ」

そう言い残すと、しわしわの男性は杖をカツカツと突きながら、甲板の上から姿を消した。

俺はふわふわ浮いているメタングに目を向け、ふう、とため息を吐く。

空は青く澄み切っている。ここから先で、こんな空を何度も見上げるんだろつな……。

「部屋、どうやって戻ろう……」

「何をしている」

俺が途方に暮れていると、再び背後から声が……って、なんだみんなして俺の背後から。狙ってんのか。

俺が心の中でぶーたれながら振り返ると、そこには相変わらずのムスツと顔をしたナツメが立っていた。

「迎えに来てくれたのか？ ナツメはやっぱりお兄ちゃん大好きだな」

「勘違いするな。お前がその辺をほったき歩いて、私まで迷惑事を被るのが嫌だったただけだ」

「ツンデレちゃって可愛いー」

「っ、ツンデっ……誰がツンデレだっ！？ 馬鹿っ！！」

ぶいつ、と背を向けると、さっさと歩き始めてしまった。

俺はメタングをボールに戻すと、足早に去っていくナツメの後を

追いかけていく。

さて、こんなやり取りが今後何回あるかな。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム Lv28 特性 テクニシャン

わざ メタルクロー れんぞくぎり きりさく

メタング Lv20 特性 クリアボディ

わざ メタルクロー ねんりき てっぺき

名前 ナツメ

手持ち

ユンゲラー Lv23 特性 シンクロ

わざ サイケこうせん かなしばり めいそう

バリヤード Lv20 特性 フィルター

わざ ねんりき リフレクター ひかりのかべ

スリープ Lv21 特性 よちむ

わざ さいみんじゅつ ねんりき

六話

「やっと船から脱出だっ……」

「はあ………こんな奴を兄だと思いたくないな……」

そんな事を口ずさんでいる俺たちが最初に足を踏み入れた街は”ミオシティ”という、巨大な図書館がある町だった。

回る目を必死に動かしながら、辺りを見回す。潮の匂いと風に満ち溢れた、ヤマブキとは違う意味で綺麗な場所だ。

クチバに似ている個所があるな。

「こんなことで大丈夫なのか、この先。船に乗る機会はこれで最後じゃないんだぞ」

「え、マジで？」

「当然だ。シンオウ以外にも、地方は多くあるのだからな」

胃がスツカラカンになってしまわぬよう気をつけねば。

今日は船旅で疲れ切ってしまったので、ここらで宿を探そう。そう切り出すと、ナツメは渋々宿泊場所を探し始めた。

なんやかんやでしっかりしてるんだな、ウチの義妹は。

ナツメが探し当ててきたのは、値段も手頃な安心して寝つけるよ
うなホテルだった。

一部屋の代金を支払い、早速ベットにダイブする俺。なんだか今
日はこんなんばかりだ。

「そつえば、あのメタングはどうしたんだ？ お前のポケモンは
ハッサムだけだったろうに」

「口調を女性らしい物にしたら教えてやる」

「無駄口叩いてないでさつさと教えてくれ」

お兄ちゃんの微かな願いも聞いてくれないのね。

俺は死んだ父さんの知り合いから引き取ったんだと、簡単に説明
してやった。すると、ナツメは少し申し訳なさそうな表情をしながら
「そうか」と答えた。

「気まずい空気に堪えられなくなった俺は、よし！ と声を張って立ち上がった。」

「もう日が沈みかけてるが、どうする？ 俺は殆ど回復したぞ」

「あ、ああ……そうだな。今日は港の方で、海の神様を称える祭りがあると聞いた」

「お？ 行ってみるか？ 子どもの小遣い程度の出費なら、直ぐに補えるだろうしさ」

「そうだな、今日ばかりはお前に賛同してやる」

「そうと決まれば、と俺は斜めがけバツクをベットのの上に降ろし、部屋のカギを持って準備を始める。」

「ナツメの方は殆ど手に持つような物は持って来ていないので、今頃何か準備する必要はない。」

「ちなみに、着替え等は俺がバツクの中に纏めて入れている。兄貴としてこのくらいはしてやらないとな。」

「二人で部屋を出て、カギを締めているとふと思った。」

「コイツ、俺のこと”お前”って呼ぶよな……。」

「なあナツメ」

「お前の考えていることなら筒抜けだぞ。断固として拒否する」

「ならせめて一回でいいから！ お兄ちゃんって呼んでくれ……！」

ガラじゃないの一点張りで、少女はそそくさと歩いて行ってしまった。

仕方ない……当分先まで我慢するか……。

町は、予想以上に賑わっていた。

街灯すらも霞んで見えるような明るい火と、猛々しいギャラドスの舞。誰のポケモンだろうか。

俺はナツメと「はぐれないように」という名目で、現在進行形手を繋いでいる。柔らかい。

多分頭の中が雑念だらけでナツメに怪しまれないか不安だったが、どうやらこのお祭り騒ぎに見とれているらしい。

子どものように両目を開いて（14歳）、いくつもの明かりが交差するのを見つめている。

「うつへー、凄い人混みだな。どうする？ 何かするか？ それとも食べる？」

出店がいくつも並ぶ中、俺とナツメは歩いていく。

目移りしているのか、少女はあちらこちらへと目を向けていた。

「あ、あれだ。あれをするぞ」

「分かった分かった。引つ張らないでくれ」

ナツメが向かったのは祭りの定番、射的だ。

頭が良いが運動系はからっきしだった気がする。まあ、あまり関係ないか。

百円を支払うと、専用の銃と弾が手渡される。

制限弾数は三発。商品を一つ落とせばそれが貰えるのだろう。

「よく狙って撃てよー」

「分かっている」

達者な口調で喋る中学生くらいの子が、必死に銃口を定めているのを後ろで眺めながら、俺は商品を一瞥する。

「こづいづいのは、何か倒れないように細工がされているものなんだが……」。

ナツメが狙っているのは、どうやらポケモンの入ったモンスターボールらしい。

まあ、ああいう商品はよくないよな。助けてあげたいんだと思う。

(ナツメは優しいからな)

「ばっ?!!」

一発目は正確に芯を捉えていたナツメの弾が、今度は大きく逸れてしまった。

キツ！ と、祭りの明かりで顔が少し赤く見えるナツメが、俺の方を睨みつけてきた。

俺、何かしたか？

うーむ、と眺める俺。真芯を捉えて微動だにしないって、流石におかしいよな。

よく目をこらせば何か見えるかも、と思った俺は、ナツメが最期の弾を無駄に終わらせて落ち込んでいるのをなだめつつ、ハッサムに何かないかと尋ねてみた。

案の定、商品には細工がしてあった。イトマルの糸だ。それも極細にし、肉眼では捉えにくいほどの。

中々手の込んだ商品だなあ……。

「おっちゃん、次は俺がやる」

「おや、次は彼氏さんが挑戦かい？ お熱いねえ」

「兄貴つすよ」

ニヤニヤしているおっちゃん。落とされないといい自信があるのだろう。

メタングを後ろに、銃を構えつつ狙いを定める。

「おいおい、ズルは無しだよ」

「しませんよ。商品にはね」

恐らく、上の方でイトマルが糸を引っ張っているのだろう。

俺は一発目の引き金を引き、先ずは狙いのモンスターボールへの弾道を確認する。

一発目はそれより少し上。恐らく糸が通っているであろう場所に弾を掠らせる。

これですべての位置確認は終わった。

最後の弾を打ち出すと同時に、俺はメタングに命令する。

「メタング、ねんりき!!」

甲高い掃除機の吸引音のような音と共に、メタングの両目が輝いた。

弾丸よりも早く作用したその技は、店の上の方で糸を張っていたであろうイトマルに牙を剥く。

そして、同時に弾丸がモンスターボールの開閉スイッチに直撃した。

「なっ?!」

上から落ちてきたイトマルに驚いたのか、それとも商品を撃ち落とされたことに驚いたのか。
多分両方だろうな。

中から現れたのは、小さな帽子をかぶったような白いポケモンだった。

出てきた瞬間に土台の上に踊り出て、俺とナツメの前ではちばちと手を叩く。

「この子は……?」

「ラルトスってポケモンだろ。今日からお前の友達だよ」

そう言っつて小さな体を抱え上げ、ナツメの腕に抱かせてやる。

俺今最高に格好いいぞ。

赤いツノを光らせながら、ラルトスはナツメに抱きつく。

多分、こいつの信号を受け取っつて、彼女はあれを狙っつたんだろう。

「その自画自賛さえ無ければ、礼の一つくらいは言っつてやるうと思っつたんだがな……」

「俺はそういっつ奴だからなっ」

にかっ、と笑っつてやり、背を向ける。

とりあえず祭りでの思い出作りは出来ただろう。俺としてもいい経験になっつた。

「おい!」

「まだ何か文句があるのか……」まだ”いやらしい事は考えていな
いぞ……」

「その、だな」

もじもじとまるで女の子みたいな仕草をするナツメ。

らしくないな、なんて笑い飛ばしてやっつたら蹴飛ばされるような

気がするので、ここは次の言葉を待つ。

「あり、がとう……………お兄ちゃん!!」

「どーいたしまして」

良い笑顔がみれて、お兄ちゃんご満悦だ。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム Lv28 特性 テクニシャン

わざ メタルクロー れんぞくぎり きりさく

メタング Lv20 特性 クリアボディ

わざ メタルクロー ねんりき てっぺき どくどく

名前 ナツメ

手持ち

ユンゲラー Lv23 特性 シンクロ

わざ サイケこうせん かなしばり めいそう

バリアード Lv20 特性 フィルター

わざ ねんりき リフレクター ひかりのかべ

スリープ Lv21 特性 よちむ

わざ さいみんじゅつ ねんりき

ラルトス Lv18 特性 トレース

わざ ねんりき しんぴのまもり おんがえし かげぶんしん

日記 アンバー

祭りのクジでわざマシンを手に入れた。メタングに覚えさせてやったが、今のところバトルの予定はない。

日記 ナツメ

あいつが私にできなかった事をやってのけた。ラルトスもみんなと同じように一生大事に育てよう。

六話（後書き）

感想等は歓迎です。

七話

はい。朝です。

俺も男なので朝は朝なりに朝なのだが、今日はどうやら別の理由で朝のようだ。

状況を整理しよう。

俺は昨日、ナツメにかなしばりをされつつ別々のベッドで眠りについた。流石にここまで信用がないと、俺も怒るぞ。

いやいや、今はそんな事でどうこう言っている時ではなくて。

単刀直入に言うと、朝起きたらロングストレートヘアの美少女が、俺の隣で寝ていた。

何を言っているか分からないと思うが、俺も分からん。

（かなしばりは解けてるし……誤解されぬよう、今の内に離れねば
っ）

するーりするーり。

若干ナツメと肌が擦れ合うが、今は我慢だ。猛獣になるわけには
いかんからな。

「なんとか脱出せい」……………」

ふと、視線を感じた。

わなわなと震えている女の子の方を振り向きながら、俺は苦笑いで返した。

「おはようさん」

「……何故私が、お前のベッドで寝ている………」

「寝ぼけて入ったんじゃないの」

「な……に……？」

今にも爆発しそうな真つ赤な顔で俺をにらむと、そそくさと自分のベットへと戻ってしまった。

ぶつぶつと自己暗示をかけているが、今は気にしないことにしよう。

時計を見ると午前八時。今日は起き次第朝食を取って出発の予定だったので、こっちはこっちで荷物を整理しておこう。

「なあ、先ずはどつするよ」

「あ、ああ、そうだな。もう次の街を目指していいんじゃないか？」

「なあ、なんで今さら布団に包まってんだ？ 早く準備しねーと……」

「…」

「う、う、うるさい………」

「んじゃ俺も、愛する義妹の匂いが残っている布団を今暫く……」

べっちーん。

そんな乾いた音と共に、俺は意識を途切らせた。

再び俺が目を覚ますと、床で無様に転がっている俺を見下ろしながら、手足を組んでいるナツメが視界に入った。

「え、今何時ですか」

「十時だ馬鹿。さっさと起きろ、出るぞ」

「いやいやいや、まだ朝飯も食ってないんだけど」

「私は食べた」

「俺が食べてないんだって」

一々うるさい男だ、などと呟きながら俺の横になった視界から消えると、暫くして一つの皿を持ってきた。

床に置かれる白い皿。その上に乗っていたのは、二個の皿と同じ

色をしたおにぎり。

両方ともへんてこな形をしている。誰かが適当に作ったのか、それとも慣れないなりに頑張ったのか。

「まさかナツメが作ってくれたのか？」

「勘違いするなよ、私はさっさと次の街へ出たいから作ったのであって、決してお前のためなどとは思っていないからな」

(無意識かは知らんが、またツンデレ発動してやがる……………だが、また赤面してぶたれるのは簡便なので、俺は硬く口を閉ざす……………)

「聞こえているんだよ間抜け!!」

218 ばんどうろ

つりびとが勝負をしかけてきた。

つりびとが勝負をしかけてきた。

つりびとが勝負をしかけてきた。

「多い!!」

「弱音を吐くな。交代でバトルしてやっているんだ」

「いやだつてさ、時間食うんだよ結構！　なんだよさっきのトレーナー！　無駄にコイキング四体くりだして！」

「こつこついうのも経験だ。文句を言うな」

早く行くぞ、と首根っこをつかまれる勢いで進まされる俺。

確かにポケモンも鍛えられるし、バトルも学べるからそれほど愚痴愚痴文句を言いたい訳じゃないんだけど。

ぶつくさ呟いていると、不意に先々歩いていたナツメが足をとめた。

当たらぬよう横にそれて視線をナツメと同じ方向に向けると、そこには盛大なため息を吐いているふなのりAが。

なんだ？　何の変哲もない、普通のトレーナーだろう？

そう言っただろうと思ったが、それより早くナツメが動いていた。

「どうかしたのか？」

年上の相手でもお構いなしの上から目線口調で喋るナツメ。大物なのか、それとも礼儀がなっていないだけなのか……。

俺は義妹の横に並ぶと、同じくふなのりの方へ目を向けた。

ふなのりは突然話しかけられてビックリしていたが、暫くして再度ため息をついた。ナツメの顔を見てため息とは、失礼なやつだな。

「いやね。最近、息子がずっと悪夢にうなされていてね……………」
まんげつじま”にいるポケモンの羽根があれば、悪夢を払えると言
われているんだが……………」

「なら行けば良いんじゃないか。アンタ船乗りだろ？」

「私もそう考えて一度向かってみたのだが、どうにもそのポケモン
は”自分と似た者”の前にしか姿を現さないとかで……………」

「え……………何その設定」

ナツメは真剣に聞いているが、俺は旅の寄り道程度にしか思えな
い。

何か感じる事があるのかな。

でも、自分と似た者って。流石にそこまで細かいリクエストをす
るポケモンは知らんぞ。

「ふむ……………その子どものところまで、案内してくれないか？」

「え？ か、構わないが、どうするんだい？」

「俺も聞きたい」

「私なら何かしてやれるかもしれないだろう、これも人との関わり
合いだ。行くぞ愚兄」

「酷え」

再びミオシティに戻ってきた俺たち。自分の殻に籠った内向的な子だと思っていたんだが、どうやら向上心が高いらしい。

自分から進んで、自分から学ぼうとし、自分から触れようとする。

えらいな、ナツメは。

悪夢にうなされる少年の額に右手を当てたまま両目を瞑っているナツメを眺めながら、俺はそんな兄馬鹿なセリフを胸中で吐いていた。

にしても、ウチの妹は悪夢も対処出来るのか？ 本当万能だな。

暫くすると、精神統一の如く集中していたナツメが、ゆっくり両目を開いた。

「ポケモンの悪戯だな。どこかに、この子に悪夢を見せているポケモンがいた」

「何で過去形なんだ？」

「一応、私が払っておいたんだが……………目を覚ますには、別の角

度からの刺激が必要だ」

「結局、その”まんげつじま”ってところに行かなきゃならない訳か」

「そうなるな……」

うーむ、と頭を悩ませていると、苦しそうな色が消えた少年の父、ふなのりのナミキが、俺たちの方へ歩み寄ってきた。

「ありがとうございます。息子の苦しそうな顔が無くなっただけで……」

「あ、ああ……」

ナツメに深々と頭を下げるナミキ。我が妹ながら鼻が高い。

何かやるせないような表情で俯いているが、ナミキの方は唸り声が消えただけで満足なようだ。
それ以上は望めない。初対面の人間相手におこがましい。そんなところだろう。

「お礼と言つほどのものではありませんが、これを……」

「え……」

心底驚き、今までにないくらい申し訳なさそうな表情で、ナツメはそれを受け取った。

「なあ……良いことしたのに、何でそんなに落ち込んでるんだよ」

場所は戻り再び218ばんどうろ。水路が続く道をメタングにのって浮遊しながら、俺はナツメに尋ねた。

だってそうだろ？ こいつは人に感謝されることをしたんだ。だからあの人はお礼に、と言って道具をくれた。

なんだっけ？ いいつりざお？

「だが、私はあの子を救えなかった……」

「救ったさ。あの子の顔、見ただろ？ あんな安らかな顔、オマエが悪夢を取り除いてやらなきゃ見られなかった」

「私は最低限のことをしたまでだ」

そう言って、ナツメは苦虫をつぶしたような表情のまま、真っすぐ前へ目を向ける。

俺からは何も言えない。人から感謝されるっていうのを実感出来ないんだろうな。

やり遂げないとダメだと思っている。だから素直に気持ちを受け取れない。

今まで閉じこもっていたツケが回ってきた訳だ。

「オマエは真面目が過ぎるんだよ。もう少し楽観的に物事を見た方が良い」

「そう、なのか……？」

「ああ。肩の力を抜け。きびきび何もかもに真摯に打ち込むのはいい事だが、細かいことに対しても全部それだと身が持たないからな」

「そんなものか……」

ふう。

まだまだ、たくさん学ぶことがあるみたいだな。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム Lv30 特性 テクニシャン

わざ メタルクロー れんぞくぎり きりさく

メタング Lv23 特性 クリアボディ

わざ メタルクロー ねんりき てっぺき どくどく

名前 ナツメ

手持ち

ユンゲラー Lv25 特性 シンクロ

わざ サイケこうせん かなしばり めいそう

バリアード Lv23 特性 フィルター

わざ ねんりき リフレクター ひかりのかげ

スリープ Lv23 特性 よちむ

わざ さいみんじゅつ ねんりき

ラルトス レベル 19 特性 トレース
わざ ねんりき しんぴのみもり おんがえし かげぶんしん

八話

さて、コトブキシティだ。

大きなあくびをする俺を、ナツメが呆れ顔で見ている。

仕方ないだろう眠いんだから。そもそも、まだ旅を初めてそんなに経ってないのにイベント多すぎなんだよ。

「はいはい！　ここで突撃インタビュー！　そのバカップルさんたち、ちょこーっとお時間頂いてよろしいですかー？」

よいしょよいしょの展開で大きな機具を持った集団が俺とナツメを取り囲む。

ナツメの方はあまり気分が乗らないのか、不機嫌そうに両手を組んでいる。

俺は妹の前に出ると、カメラから遮った。

「すみません、時間はありますけど俺ら兄妹でして……つか何でバカップル？」

「あらあら、そうでしたか。どうやら私の勘違いだったみたいです。では、お兄さんと妹さんに質問してもよろしいですかー？」

「ええ、構いませんよ。何でしょう？」

後ろから視線が突き刺さっている。恐らくいつもの情けなさとの変貌っぷりに呆れているのだろう。

(仕方ねーだろ、テレビの前でまでくたぐたしてられん)

「では直球に本題！ ずばり、現在シンオウで目撃されているという、宇宙から来たポケモンについてどう思いますか!?!」

元気だな。ていうか、今そんなのがこの辺うろついてんのか。初耳だぞ。

「そうですね……僕は好きですよ、そういうの。もしその宇宙から来たポケモンがどこから来たのか分かれれば、そのポケモンの母星にもまだ多くのポケモンがいるかもしれないんですから」

「おおっ！ これは好感触か?! ではでは次の質問!」

「どござ」

ナツメがさっさと終わらせると空気で語っている。怖い。

いや、だってこれ地方で放送されるんだろ？ 悪い顔してるところ見られると、始まったばかりの旅が再び船旅になってしまう。

そうすると、オマエの眼の前でグロテスク吐瀉物放出するハメになるんだぞ。

営業スマイルレッツ作り笑い。自分でも胡散臭い笑顔でカメラに微笑みつつ、次の質問とやらを待つ。

「トレーナー一人として、ポケモンバトル！ そのカメラマン

と私で、あなた方御兄妹とお願いできますか?!」

「なんだ、そんなことですか。構いませんよ」

「おい……」

(嫌なら俺一人でも構わん)

「……………チツ……………仕方ない」

珍しいな。

バトルはあまり好きじゃない、やらなくてもいいバトルはしない。そう言っていたが。俺の意図が伝わったのかね。

「使用ポケモンは一体ずつ。では、スタート!」

レポーターの女性がそう告げると同時に、カメラマンもボールを投げる。

双方が出したのは、ルナトーンとソルロック。多分ナツメは初見か? でもエスパーだしな。もしかしたら知ってるかも。

「おいナツメ、あの二体のこと、知ってるか?」

「いや、始めて見たが……………お前は?」

「お兄ちゃんを舐めるなよ。いや、舐めてもいいけど」

「またかなしばりに会いたいのか……………」

「いやごめん。あれ怖いからホント」

俺が出したのはメタング。ナツメはバリヤード。ああ、タッグを組むポケモンとしては有りがたいな。

「バリヤード、ひかりのかべ……」

乗り気ではないが、どうやらやる事はやってくれるらしい。

バリヤードが半透明の大きな壁を張ると、そこに相手の強力な攻撃が飛び込んでくる。

ソルロックのかえんほうしゃだ。はがねのあるメタングでは、ひかりのかべ無しだとあっという間に落ちてしまっていたかもしれない。

「メタング、メタルクロー！」

バトルは俺たちの勝利という形で終わった。景品だとかキャンペーンだとかでポケッチという小型機械を貰ったが、今は時計以外に使えるような機能はない。

あれはシンオウ地方中で放送されるらしく、一部地域でも流されるらしい。聞くとところによると、カントーもそのうちに含まれるのだとか……。

「あんな媚び媚びの態度をとって恥ずかしくないのか？」

「体裁つてのを気にしないと、世の中渡り歩いていけないんだよ」

よっぽど俺の態度が気に入らなかったのか、それともバトルの後だからなのか。まだしかめっつらをしている。

「お！ トレーナーズスクールだってさ。寄ってくか？」

「今更何を学ぶつもりだ………今さっきトレーナー二人倒してきたばかりだろうに」

「だって、学生さんとか見てみたいじゃん」

「直ぐに色目を使う奴は嫌いだ」

「ナツメが俺のことを嫌いでも、俺はナツメのことが大好きだからいいんだよ」

「だから、なぜお前はそんなことを平然と口に出れるんだ?!」

「お前の兄ちゃんだからだよ。ほら、さっさと行くぞー」

ぐいぐいとナツメを引っ張りながら塾のような建物へ入っていく俺。

傍から見れば怪しいやりとりに見えなくもない。傍から見たわけじゃないけど。

「おい！ まだ行くと言ったわけでは……」

「そう言いながら着いて来てくるくせに」

「そ、それはお前が引つ張るから……………ああもっつ！」

観念したのか、渋々俺に引かれて足を進めていく。

いやあ、入ったは良いが、特にすることも無いよな。

すると、廊下の方でポケモンバトルをしている小学生くらいの子どもたちが目に入った。

「ビッパ！ たいあたり！」

「ムツクル！ すなかけだ！」

懐かしいやりとりを眺めながら、俺は無意識に笑っていた。ほほえましい光景だ。

いつの間にか、ナツメも子どもたちのやりとりに目を奪われていく。

「どうですか、我が校の生徒たちは」

不意に、扉から髭を生やした後期高齢の男性が現れた。

もうすでに退職していても不思議ではない見た目だが、自分の意思で職を離れないという人も時々見る。

俺は子どもたちのバトルをじっ、と見つめているナツメの元を離れ、その男性の方へ歩み寄った。

「ここはやっぱり、ポケモンバトルを教えてらっしゃるので?」

「いや、きちんとしたポケモンとの接し方も学んでもらっているよ」

「そうですか」

悪くない学校だな。

そう感じた。

「お兄ちゃん、ぼけもんとれーなー?」

ふと、手を引かれた。そこには無邪気な顔をした小さい女の子が、澄み切った瞳で俺を見ている姿が。

俺は「そうだよ」と答えてやると、屈んで目の高さを同じにしてやる。

子どもと接するには、まず同じ目線で会話をすべきだとどこかで聞いた。

「つよいの?」

「中の下かな」

「?」

「ぶつう、ってことだよ」

「ぼけもん見せてくれない?」

「はい、はい」

二つのモンスターボールの開閉スイッチを押し、メタングとハッサムを出す。

女の子は珍しい物でも見るような目で見とれており、ハッサムのハサミに触ったり、メタングの腕を叩いたりしていた。

このあたりじゃ見れないポケモンだからな。

「何をしている」

「へ？」

女の子をメタングに乗せたりして一緒に遊んでいると、威圧感たっぷりの目をしたナツメが俺をにらんでいた。

何を怒っているか知らないが、今は刺激せぬよう言葉を選ぶべきだろう。

「女の子と遊んでいます」

「……………」

「？」

「もう行くぞ。いつまでも一か所に留まるつもりはないからな」

「おおおお、おい?! どうしたんだよ?? てか痛いって!」

さよーならー、と手を振る生徒たちと男性。俺は痛みに耐えながら笑顔で手を振り返し、無表情でもう一方の腕を引っ張るナツメに尋ねた。

「ちよちよちよちよ、痛いって! どうしたんだよ!??」

「私にはあんな笑顔……向けなくせに……」

「はい？　なんて？」

「何でもないさ」

もう何なんだホント。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム Lv32 特性 テクニシャン

わざ メタルクロー んぞくぎり きりさく

メタング Lv25 特性 クリアボディ

わざ メタルクロー ねんりき てっぺき どくどく

名前 ナツメ

手持ち

ユンゲラー Lv28 特性 シンクロ

わざ サイケこうせん かなしばり めいそう

バリアード Lv24 特性 フィルター

わざ ねんりき リフレクター ひかりのかべ

スリーブ Lv23 特性 よちむ
わざ さいみんじゅつ ねんりき

ラルトス Lv19 特性 トレース
わざ ねんりき しんぴのまもり おんがえし かげぶんしん

八話（後書き）

日中母が居ぬ間に書いているので、土日は更新が難しいかもしれ
ません。

申し訳ない……。

九話

さて。俺は今、反抗期の妹と一緒に釣りをしている。
理由は簡単。水上を移動できなければ、行動圏も限られてくるか
らである。

「釣れねえ」

「もう少し静かに待てないものか……」

「だってもう三十分はこうしているぞ？ 海に飛び込んで探した方がマシなんじゃないのか？」

「釣りとはそういう物だろう。私はそう学んだが」

ぷらーんと垂れた釣り糸を眺めながら、俺は貧乏ゆすりを高速化させていく。

今なら鍾乳洞のしずくもびっくりな勢いで穴を空けられそうだ。

「やべえよこのままじゃ地面に風穴が………おお?!」

「来たか」

ぐいぐいつつ、と俺とナツメの竿が揺れる。なんかいやらしいな。
ナツメに冷たい視線を向けられるのは御免なので、今回は横線へ

逸れることないよう気をつけよう。

「くっ……中々手強いな……」

「ユンゲラー、サイケこうせん！」

「え、ちょま……」

どっぱーん、と盛大な水しぶきと共に海水が巻き上がり、俺はもちろんびちゃびちゃ。

せめてナツメの濡れ濡れスケスケの姿を見ようと目をこらしたが、どうやらバリヤードの空気の壁で、水は浴びていないらしい。

「浴び損だよ……」

「無駄口叩いていないで、お前もさっさと手持ちを出せ」

そういうナツメの視線の先には、星型のポケモンがこちらを向いて構えていた。

ヒトデマンだ。

「え、俺が釣ったポケモンは？」

「そいつだ」

ナツメが指差す先では、ぴちぴちと儂く跳ねるコイキングの姿が。三十分待つてこれかよ。

俺がコイキングを海へリリースしているうちに、ナツメはヒトデ

マンを捕まえてしまっていた。
早いな本当。

「はあ……俺は結局また待つハメに……」

「お前はメタングに乗って移動できるのだから、問題ないんじゃないのか？」

「あ」

「どうやら、本当に頭の中に脳みそがあるのか確かめねばならんらしいな」

「いやちゃんとおあるから。それよりどうするよ」

「何をだ」

「何って……これからだよ。今のところ、目標なんてないしさ。だから進んでいくってんならそれでも良いけど」

元々大それたゴールがある訳じゃない。成長って名前の、極普通の冒険だ。

ナツメは釣竿を俺のバックに収めながら、口元に手を当てて考える素振りを見せる。

「この地方には、ミオ以外にも港がある町は？」

「キツサキだな」

ナツメが言いたいのは、他の地方へ向かえる港。そこを一区切り

の目的地にして、シンオウを回ろつと言つことだった。

流石我が妹。冴えてやがる。

だとすれば、ルートは？

「それはお前に任せる」

「んじゃ、とりあえず北のソノオタウンに行くとするか。デケー花畑があるらしいぞ」

花畑という言葉を出すと、ナツメは少し頬を緩ませて「そ、そうか。花畑か」と見て分かるように楽しみにし始めた。

何でニヤけてんの？ と年頃の少女に尋ねるのも無粋なので、とりあえず気づかぬフリをしておくことにしよう。

ほぼスキップ調のナツメに、俺は少し早足で後ろから着いていった。

「ナツメもそれなりに女の子だな」

ソノオに向かう途中の俺たちは、暗がりの洞窟立ち入ろつとしていた。

足元が不安だ。こんなことなら、電気タイプのポケモンも手持ちにいれておくべきだった。

ここを出たら捕まえるか。

俺がぶつぶつ呟いていると、くいくいと何かが服の袖を引っ張ってきた。

どうしたのかと視線を向けてみると、そこにはさっきのスキップが嘘のように顔を青くした義妹の姿が。

「なあ、ここで提案がある」

「くつついて進む以外なら聞く」

しゅんとするナツメ。ああ可愛い。

もっといじめてみようかな……いやいや、俺はDS鬼畜野郎ではないぞ。

「ほら、行くぞ。どうせ出口はすぐそこだって」

「そ、そうか……」

「ゴーストタイプの一匹や二匹は出るかもしれんがな」

「え、ええ?!」

いやあ面白い。

こうしてビビってる時は集中できないのか、心を読まれることもないし。

ハクタイの森に在る「もりのようかん」には絶対寄るぞ。

「超能力が使えて、悪夢まで消し去れるってのに、何でお化けなん

「ざ怖がつてんだか……」

「ふ、ふん。誰が怖がつているだど？」

「水滴が落ちる度に跳ねてるオマエだよ」

人が通れるように整備されてはいるが、何せポケモンの住み着く場所だ。

畑をディグダが通れば耕されて喜ばれるが、こうして人が通るための道においては話が別になる。

「段差だ、気を付けろよ」

「ああ……」

少し慣れたのか、余裕ができて周辺の地面状況を確認しながら進んでいる。

「やっと半分つてとこか」

「さっさとこんなところ」

ヒチャ……………。

不意に、ナツメの肩へ何か垂れ落ちてきた。

二人同時にゆっくりと暗がりには潜む天井を見上げる。

何が……。

そこにいたのは、大きな体を垂らしながら、それに比例する大きさの口を広げた「マルノーム」だった。

そこから、半透明の粘着質な液体が糸を引いている。

つか、何でシンオウにマルノーム？

「何だ……これは……」

「ナツメ!？」

お、おおう、これはエロチック……じゃなくて。

驚いたナツメは腰を抜かして地面に尻餅をついている。

見たところ、あの液体は唾液みたいなもんだ。だとすれば、次は丸のみか毛穴からの猛毒液。

「メタング!」

叫び声と同時に、青い巨体が俺とナツメの真上に出現した。

ドロツとした薄気味悪い有毒の液体が、マルノームの全身から噴き出す。

だが、残念ながらメタングには通用しない。

「鋼鉄に、んなチンケな攻撃は効きませんでした。ねんりきだ、メタング」

爆音と共に、マルノームの薄紫の体が天井に激突した。

落石をメタングが防ぐ。

「す、すまない……無様な所を見せてしまった……」

「いいさ。むしろごちそうさまでした」

「？ 何のこと………！？」

最初は肩だけだったが、今は綺麗な長い髪にも絡み付いている。半透明なせいもあってか、やつほい。

「こつちを見るなッ！」

「眼福眼福」

蹴飛ばされ、俺は無様に地面を転がった。

その上かなしばかりまで掛けられたことは、まあ言うまでもないだろう。

あの後、マルノームのトレーナーだと名乗る男が洞窟の出口から走ってきた。

なんでも遠方からの旅人から預かったポケモンらしく、散歩でもさせてやるつもりだと思ってボールから出した瞬間、言うことを聞かずに

こんなところまで来てしまったんだとか。

出口から来たということは、ソノオの住人か。

おそらく、マルノームは花の香りが気に入らなかつたのだろう。

聞いてみると、彼は花屋の従業員らしい。

まだネトネト液体を被つた状態のナツメは……俺の後ろに隠れている。

「ご迷惑をかけたみたいですし……どうです？ 旅をしているのなら、ウチに泊まっていきませんか？ 今日はまだ遅いですし」

「ウチって、花屋？」

俺が訊ねると、男性はこくりと頷いた。

丁度いい。ナツメもすぐにシャワー浴びたいだろうしな。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

俺とナツメは、花屋の三階にある客室一部屋に案内された。

部屋に入るや否やナツメはシャワーへ。どうやらよっぽど気にしていたらしい。

「失礼するね」

退屈をもてあましていると、俺より少し年上と見える女性が扉を開けた。

長い朱色の髪が特徴的。

中三程度のチエリーボーイとしては、正にドキドキの展開だ。俺はそんな子どもでは断じてないがな！

「どうかしたんですか？」

「お茶とお菓子をね」

そう言うと、彼女はトレイをテーブルの上に置き、ボールから出しているハッサムとメタングを、珍しそうにまじまじと眺め始めた。

「この子、メタングだね。ハウエン地方で見たことあるよ」

「行ったことが？」

「一時住んでいたんだ」

懐かしむように撫でている。

メタングは喜んでいるが、それを見るハッサムは鋭い目で女性を半ば睨んでいた。

何だ？　自分は撫でられないから膨れてんのか？

「君のハッサムは優秀だね」

「はい？」

何を言っているのだろう。

俺がそう思っただけでハッサムから目を移そうとしたときには、既に彼女の姿はなかった。

何だったんだ？

「そういえば、あいつ着替え持っていってないな……」

無論、我が義妹の事だ。

急いでいたせいだろう。バックの中を覗き込み、寝巻きと下着を取り出す。

思わず息を飲み。いやだってそうだろう？

鋼タイプのポケモンを持っているだけあって、俺の理性は鋼鉄のごとく強固だ。

しかし、年頃の女の子の下着がこんなにもそそる物だとは思わなかった。

どーする。落ち着け俺、落ち着け俺、このままナツメの下着を我が物に……いやいや、それは家に帰ってからでいいだろう！

「良くないだろ俺！ 全然落ち着いてないじゃねーかっ」

頭を抱えて汗水たらしながら悩んでいると、脱衣所の扉が俺の思考を潰しながら開いた。

「なぜ私の下着を握り締めて踊っている」

ヤバイヤバイヤバイ。

崩壊しかけた理性の目の前に現れたのは、どこから拾ってきたか知らない学生が着るカッターシャツのような白くブカブカのYシャツ

ツを着たナツメだった。

とてつもなくマニアックな格好だが、よくみると言えばよくみる。透き通るような肌に、今はほのかな赤みが差している。

壁と扉の隙間程に圧迫された理性は、今にも消えてなくなりそう。誰か助けて。

そんなことすら考え始めた俺が口に出したのは、こんなことだった。

「それは……俺がたぎっているからさ」

尋常じゃない冷酷な視線を浴びる未来が見える。僕にも見えるよ。つか、言ってる意味がわからん。

干魅した村の住人が空を見上げるような勢いで顔を上げると、そこにあっただのは……。

「……そうか。なら仕方ないな」

「……………え？」

あれ？

「罰としれ、わらひにちゅーしろー！」

「おわ?!」

突然身を乗り出したナツメ。俺はそれを避けるようにキノガッサもびっくりなフットワークでベットから離れる。

よく見ると、義妹の顔は何だか高揚としていた。
もしかして……。

「お前、酔っばらってるのか？」

風呂で酔う奴なんて初めて見たぞ？ まあ確かに、今日は念入りに体を洗ったりしたせいで長風呂にはなっていたが……。

「おにいちゃあーん……えへへ」

「ッ?!」

理性と義妹の貞操がヤバイッ!

背中に手を回しながら迫るナツメの顔。火照った頬とトローンとした目が、俺の視界を包む。

エロいぞ! たぎる! たぎるぜええええええ!

内心どっかんどっかんだが、残念ながら理性をスパークキングする訳にはいかない。男である前に兄だからな。

「おにいひゃんは、わらひのこときらい?」

「ナツメのことは好きだが、酔っ払いは嫌いだな」

「じゃあ、今のわたひはきらい?」

クソッ! 一々顔を近づけてきやがる!

想像してごらん、俺。ナツメのトローンとした目が俺を映しながらあばばばばばばばば。

俺は今にもタガが外れてしまいそんな理性にてっぺきを命じ、無理やり作ったガタガタの笑顔でナツメを引き剥がす。

「ごめんなナツメ、お兄ちゃんって呼んでくれるのは嬉しいけど、今のお前は正気じゃないんだよ」

「そんなら……お兄ちゃん、やっぱりわたしのこと嫌いなんだあ……お兄ちゃんがわらひのこと好きって言った時、とっても嬉しかったのに……うう……」

「ちちちち違うぞナツメ。お兄ちゃんはお前のことが嫌いなんてありえないってっ!」

「えへへ……」

ああ抱きつかれた。

今日はこのまま寝るのかな。明日朝起きたら、またかなしばりの感触で目が覚めるのだろう。

レポート

名前 アンバー

手持ち

ハッサム Lv32 特性 テクニシャン

わざ メタルクロー れんぞくぎり きりさく

メタング Lv26 特性 クリアボディ

わざ メタルクロー ねんりき てっぺき どくどく

名前 ナツメ

手持ち

ユンゲラー Lv30 特性 シンクロ

わざ サイケこうせん かなしばり めいそう

バリアード Lv26 特性 フィルター

わざ ねんりき リフレクター ひかりのかげ

スリープ Lv25 特性 よちむ

わざ さいみんじゅつ ねんりき

ラルトス Lv19 特性 トレース
わざ ねんりき しんぴのまもり おんがえし かげぶんしん

日記 アンバー

今日は色々疲れた。以上。

日記 ナツメ

あいつをからかってやろうと思って、間違えて着替えに入っていた父のシャツだけを着て出たのだが、思いの他恥ずかしくて目の前が真っ白になってしまった。

長風呂のせいだろうか……とんでもないことを口にした気がする。

九話（後書き）

今日は今から用事で、明日は父の墓参りに行かなくてはならないので更新できそうにないです……。

合間合間でできるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8693z/>

ナツメの義理の兄になってみたいという願いを持つ俺が羨むようなお話

2012年1月2日10時49分発行